

日本を救うために、日本を出よう！**

(前日米教育委員会エグゼクティブ・ディレクター キャロライン・マタノ・ヤンによるプロジェクトの提案)

**まったくの偶然だが、アスペン・インスティテュートのエグゼクティブ・バイスプレジデントのエリオット・ガーソンが次のタイトルで文章を書いている。"To Make American Great Again, We Need to Leave the County" (「アメリカ人を再び素晴らしくするために、国を出よう」) 2012年7月 『アトランティック』。

背景

2012年5月に開催されたフルブライト60周年記念式典での2つのできごとがこの提案につながった。

1. まず最初のできごとというのは、1つのことがらというのではなく、同窓会のリーダーたちと交わした会話であり、その中ではいつも同じ話題が持ち上がる。つまり、いかに若いフルブライト同窓生に同窓会活動にかかわってもらおうかということだ。1950年から60年代にかけてアメリカで学んだ初期の同窓生は、プログラムへの恩返しという気持ちで活動していた。その結果、フルブライト・プログラムとしてより多くのアメリカ人を日本へ招聘するための資金集めが、1982年のプログラム30周年記念で創設された同窓会の重要な活動となった。しかし、そのような動機というのは、特に若い世代にとっては、もはや同窓会の妥当性を維持するに十分なものではない。それでは、いったい、同窓会は何をしたらよいのだろうか。
2. 2つめのできごとというのは、5月26日土曜日のシンポジウムでの発言だった。あるパネルでは、3人の若いスピーカーたちに、東日本大震災後の日本に対する希望を語ってもらうものだった。パネリストが一通り発言した後で、司会者が各人に長期あるいは短期の目標を尋ねた。女子高校生のパネリストは、「働く女になりたい」と言った。このシンプルで単刀直入な答えに、襟を正す思いがした。なぜなら、2012年ではなく、50年以上も前のものだろうと思う答えだからだ。ディスカッションは日本語で行なわれていたので、彼女が質問を誤解するはずはない。こんな時代遅れに思えるようなことを彼女が言うに至った教育や個人的な環境はどんなだったろうと考えさせられた。

後で分かったことだが、私のこの驚きは珍しいことではなく、ランチをともにしたフルブライトの

女性同窓生たちも同じ反応だった。彼女たちは、午後のパネル「女性達は世界へはばたく」に登壇することになっていた。この話題から、IIEが毎年発表する統計が減少傾向を示すように、なぜ日本の若者が留学することに関心を持たないのかというディスカッションになった。津田塾大学の飯野正子学長は、同大学でさえ、姉妹校であるプリンマー大学（津田梅子の母校でもある）との交換留学への応募者がなく、二次募集をしなくてはならないのだと言っていた。その一方、目の前にいるフルブライト同窓生たちは、留学によって、日本でも海外でもさまざまなキャリアパスを達成するための確信と自信が与えられたのだという強い裏付けだ。彼女たちは「働く女」の優れたモデルである。

課題

日本は危機的な状況にある！ 東日本大震災に際して、日本人はみな、政治家たちが派閥争いを一時的にでもやめて、復興に向けて国をけん引していくものと期待していた。残念なことに、そういうことにはならなかった。さらに、経済状況は1990年代のバブル崩壊以降、20年以上もの間低迷している。残念ながら、政界からも財界からも国を元気づけるような人材は出てきていない。

このような背景のなか、アメリカで学ぼうという日本人の数がこの数年で減少していることは問題である。中国や韓国、インドではその数は増加しており、そういった人々は、さまざまな分野で世界的にますます重要な役割をはたしているからだ。

日本人女性の状況は、数十年前に比べれば、よくなっているかもしれない。しかし、それでもまだ経済や社会における平等という点では男性に後れをとっており、旧態依然の男社会の中で向上するために特別な励ましが必要だ。（このような一般的に認識されている見解の裏づけとなる統計を示すことはこの提案の意図するところではなく、その必要もない。）女性の役割についての従来の日本の文化的価値観というのは、このインターネット時代でも覆すことは極めて困難だ。不幸にも、日本という国は、そのもっとも豊富な資源の1つである女性を有効活用しておらず、女性が自身の持つ能力を向上させ、伝統に縛られた日本社会でリーダーになるよう背中を押されるまでは、あらゆる面において、真に進んだ社会になれるかどうか、疑問である。

60年前から現在に至るフルブライトの女性同窓生たちは、留学がどのように役立ったのかを証明している。ここでの課題は、帰国後に日本を救うことを視野に入れて、より多くの日本人女性たちが日本を出るにはどうしたらよいかということである。

プロジェクトの提案

以下は長期プロジェクトの提案だが、同窓会が引き続き活動していくうえでの苦境と、若く優秀な女性がのちにリーダーとなるために留学するよう促す必要性、そして先進国としての日本の将来に対する懸念を結びつけるものである。目標は壮大だが、提案自体はささやかなものだ。日本人が従来から定評を得ている利点を生かす。つまり、集団の利益のためにともに働き、会議を組織するのだ。

フルブライトのシンポジウムの終わりに、私は偶然、あの「働く女になりたい」といった女子高校生とエレベーターで一緒になった。「女性フルブライターに少しは元気をもらいましたか？」日本語で聞いてみた。「はい」と熱っぽい答えが返ってきた。彼女にとって、アメリカ留学後にさまざまなキャリアを積んでいる女性たちに会い、話を聞くことは、貴重な経験だったのだろう。「より多くの女子高校生や大学生が彼女たちと交流できれば！」と私は思った。異なる部門や分野の間に見えない壁が高く立ちはだかり、縦社会が異なる階層同士の交流を妨げる社会において、このプロジェクトはいったいどのように成し遂げられるのだろうか？

あらゆる分野で豊富な人材を擁するフルブライト同窓会に参加してください！ここに示すのは、同窓会が長期プロジェクトとして導入できるワークショップを支援する提案である。30年前の設立以来、資金集めが同窓会の主要な活動となってきたが、このプロジェクトは同窓会の新たな「存在理由」ともなるだろう。なぜなら、将来的なリーダーを選ぶことによって、フルブライト・プログラムの持つ相互理解を深めるという目的に合致するからである。

1. 同窓会（すべての支部組織）は女子高校生と大学生を招待して、ロール・モデルとなるフルブライトの女性同窓生（以下、同窓生）と交流を持つ半日のワークショップを後援する。

2. 同窓会は、参加者を把握するために地域の高校や大学と手を結ぶ。
3. 地域によっては、招待者の数は少なくなるかもしれない。たとえば、東京では高校と大学で半数ずつとして100名程度であろう。同窓会は、会員を通して、この企画に関心を持ち、参加者が見込める高校や大学を選ぶ。
4. ワークショップは、以下の内容である。(a)基調講演：年長の女性同窓生が、日本における女性という幅広いトピックで基調講演を行なう。(b)パネル1：あらゆる分野の中堅女性たちが、フルブライト・シンポジウムの時のように、自身の仕事について語る。(c)パネル2：最近帰国した女性グランティイーがアメリカ留学について語る。このように、本プログラムでは、年長、中堅、最近の女性フルブライターを取り込むことになる。
5. 食事というのは、いつでも交流や人脈づくりの場では潤滑油となるので—それはワークショップの重要な目的でもある—ランチのグループは高校生と大学生の混合とし、パネリストがグループの間を回る。
6. 最後に、簡単な無記名アンケートを実施し、参加者の意見や感想を聞く。

東京で開催される最初のワークショップは、国内の支部ごとにふさわしい形で、定期的（たとえば隔年で）開催される。講演者とパネリストは、必要であれば他機関からアメリカに留学した同窓生以外の者も含むこともあるが、基本的には地元のフルブライト同窓生であるべきである。

期待される効果

1. 同窓会は、資金集めやアメリカからのグランティイーに対する援助の提供、不定期プログラムの後援、例会の開催などの従来の活動を補完する新たなそして重要な活動に取り組むことになる。会員数の少ない地域の同窓会では、目玉となる。
2. 本プロジェクトはあらゆる層のフルブライト同窓生、つまり年長者、中堅者、最近の帰国者が参加することになる。若い同窓生を巻き込む動機づけとなるだろう。
3. 本プロジェクトは同窓会と地域の高校や大学との連携を促すもので、学校側の協力は参加者を把握するために必要である。
4. 本プロジェクトは、若い女子学生に働きかけることになるが、これによって、彼女たちは

何年か先にでも留学しようとするきっかけになるだろう。

(たいていのフルブライト応募者は、大学の先生の勧めによる。このワークショップは、学生たちが学究生活のより早い時期に影響を与えることになる。)

5. 本プロジェクトは、他の活動と同様に、東京同窓会に先導的な役割をお願いすることになる。東京同窓会は、他の同窓会に働きかけ、必要に応じて支援を行なう。それにより、同窓会間のコミュニケーションが活発になる。
6. 本プロジェクトは、将来、出願者となるであろう人々にフルブライト・プログラムを広く知らしめることになる。

経費について

会場

条件にふさわしく、使用料も手ごろな会場を探すのは、もっとも大きな問題かもしれない。共催する大学はどこであっても理想的な会場となるであろう。たとえば、東京では津田塾大学が理想的である。飯野学長の個人的な関心（シンポジウムの際に話を聞いて、私はこの提案を書くことにした）やこのアイデアが生まれた津田ホールの使用が可能であることからだ。（津田梅子は、留学によって女性が何を成し遂げることができるかという究極のロール・モデルであることは言うまでもない）。

(そのほかの可能性として、卓越した同窓生である明石康氏が理事長を務める国際文化会館がある。氏は私との会話でも同窓会の将来についても懸念を示していた。)

参加費

ワークショップは無料であることが理想だが、同窓会予算は会費で賄われていることから、参加者にはお弁当代（500円程度）を負担してもらいたい。先述したように、食事はこのプログラムの重要な目的でもある、くつろいだ雰囲気での交流の潤滑剤となる。女子学生とうのは、学校では先生や教授がロール・モデルであるのだが、ふつう、学校以外ではロール・モデルとなる人たちと話す機会がない。

謝礼

スピーカーの方々には、このワークショップの目的をよく理解して、ボランティアで引き受けていただくのが理想的だ。(注：1979年12月にフルブライト・プログラムが日米両国から助成を受けることになるまで、選考委員会の面接官は各2名のアメリカ人と日本人が務めたが、おいしいお弁当が出ただけで、謝礼ななかった。これがアメリカ流のボランティア精神だと思っていたのだ。1980年に両国から資金を得るようになって、日本流の「謝礼」という慣習が取り入れられたが、その額は他の機関と比べると低めだった。)

その他諸費用

プログラムや名札は、出来るだけ簡単なものにすべきである。たとえば、プラスチックの名札の代わりに、受付で参加者がラベルシールに名前と所属を自分で書くようにする。プログラムは、フルブライト・シンポジウムの時のように、1枚のチラシにする。

その他検討事項

ワークショップのテーマ

さまざまな娯楽に囲まれた高校生や大学生に訴えかけるために、このワークショップでは、よくある日本の会議で使われるような何でもありというタイトルではなく、若い女性を惹きつけるはっきりとしたタイトルをつけたい。そのタイトルは国内で行なわれるすべてのワークショップで用いられ、いずれ「あの」ワークショップだと分かってもらえるように継続して使う。タイトルは、たとえば、*"Women: Save Japan By Leaving Japan"* または、もう少し控えめに *"Japan's Future Requires Women Leaders"* などである。

日米教育委員会の役割

フルブライト奨学金の広報は、今や日米教育委員会が直面している大きな課題の1つである。日本で唯一の団体だった時代は遠い昔のこと。日米教育委員会は同窓会に必要な支援を行なうことで、このプロジェクトにおいて重要な補助的役割を果たすだろう。

同窓会が組織された1982年当時、日米教育委員会は各支部に対して、初期費用を賄うための立ち上げ資金を提供した。今回もとくに資源が限られている小さな支部に対して、同様のことが考えられる。

男性会員について

言うまでもなく、男性会員はこのプロジェクトに必要不可欠だ。同窓会のリーダーであり、会員の多数を占めているからだ。男性会員の強力な支援なくしては、このプロジェクトの実行は難しいだろう。男性はロール・モデルにはなり得なくても、これまでの日本の例でみるよりもっと女性を支援しようという気持ちのある方には、スピーカーになってもらうこともできるだろう。

結論

日本近代史において、2つの驚くべき進歩の時代があった。明治時代と第二次世界大戦後だ。明治期には、青年たちが世界各国へ留学に送り出され、帰国後にリーダーとなった。第二次世界大戦後には、フルブライト・プログラムがリーダーの育成にとっても重要な役割を果たした。そのことは、1982年のプログラム30周年の時に明らかとなった。日本は再び危機的な状況にあり、昔のような素晴らしいリーダーを欠いて、計り知れない将来に向かって、手探りで進んでいるように見える。フルブライト・プログラムは、1982年以来、同窓会の強い支援を受け現在に至るが、またもやこのプロジェクトによって、日本の未来に貢献することができるだろう。最後になるが、このプロジェクトはフルブライト・プログラムにしかできない。なぜなら、世代を超えて、広く深く人材を擁するプログラムは、他に類を見ないからである。